琉游舎

# アトリエ琉游舎だより 160号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2023年8月30日発行

# 秋の彼岸会法要

## 9月24日(日)10時半

〇彼岸は悟りの世界。煩悩に満ちたこちら岸（此岸）に対して極楽浄土の向こう岸 （彼岸）を表します。私たちは六波羅蜜の教えを実践する事により彼岸へ渡るとことがで きるとされていますが 凡人であるこの身では、六波羅蜜の教えを毎日実行することは 難しいことなので、せめて春と秋の年２回はその教えを実行する。これが現在の彼岸法要 の意味です。

〇ちなみに六波羅蜜とは彼岸へ到達（パラミータ）するための６つの実践徳目。 １布施：施しをする。２持戒：戒律を守り反省する。３忍辱：不平不満を言わずに耐え忍ぶ。 ４精進：一所懸命努力する。５禅定：心を静かに保つ。６智慧：真実を見抜く智慧をもつ。

〇「彼岸」というとなにやら抽象的な場所に聞こえますが、私は日常のやすらぎのところこ そが「彼岸」であると思っています。自分自身が自由で素直で柔軟になったときに顕れる 心の平安が、「やすらぎのところ」であり、今生活しているこの場が彼岸です。

〇年に２回のお彼岸にはお墓参りや、おはぎを作ったり、茶をたてたり、瞑想したり、掃除をいつもより念入りにしたり、花を植えたり、鳥の声に耳を傾けたりと、いつもと違うことを一つ実践してみてください。それがあなた自身の年2回の六波羅蜜の実践です。

〇琉游舎で年2回の六波羅蜜の実践を一緒にしてみませんか？

〇「暑さ寒さも彼岸まで」と言いますが、秋のお彼岸を過ぎると陽が沈む時間が急に早まってくるように感じます。暑かった夏とお別れをして、涼しい秋の夜長を楽しく迎えられるよう琉游舎の秋の彼岸会法要で心穏やかなひと時をお過ごししてみてはいかがでしょう。

〇琉游舎の活動は営利事業ではありません。お布施は一切お構いなきようよろしくお願い申し上げます。宗教宗派を問わない、すべての皆さんのための開かれた「場」です。

## 9月スケジュール

| 月 | 火 | 水 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 31 映画会 13時半から | 9月1日 | 2 | 3 写経会 13時半から |
| 4 | 5 読書会 13時半から | 6 | 7 映画会 お休み | 8 | 9 | 10 |
| 11 | 12 | 13 | 14 映画会 13時半から | 15 | 16 | 17 |
| 18 | 19 | 20 | 21 映画会 お休み | 22 | 23 | 24 彼岸会法要 10時半 |
| 25 | 26 読書会 13時半から | 27 | 28 映画会 お休み | 29 | 30 | 10月1日 写経会 13時半から |

**読書会**
9月5日
9月26日
（火）13時半

**写経会**
9月3日
10月1日
（日）13時半

**映画会**
変則日程です

# 狂言綺語…仏の道をあゆむ

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」有名な夏目漱石「草枕」の冒頭です。昔読んだこともありこの一節は引用される機会が多いので、意味を理解していたつもりだったのですが、前回の狂言綺語では「棹さす」の誤用をしてしまいました。前号の末尾で*“私は変化の波に乗ることでも変化に竿をさすことでもなく云々”*と書きましたが、この「変化に竿をさす」は文脈からすると「変化の波に乗ること」と対をなしているので「変化を押し戻す又は止める」という文意で使用していることは明かです。印刷して皆さんに送付し掲示してから気づきましたが、後の祭りです。この用法では変化をさらに推し進めていきますと重ねて言っていることになり誤用です。今までの文脈からすると、変化を止めることも進めることのどちらにも与さずありのままの関係を尊重していこうという文意のつもりだったのです。「綸言汗のごとし」などと大げさなことを言うつもりも、私の言葉にそれほどの影響のないことも自覚しているので、訂正せずにほっておこうと思っていました。

私が狂言綺語を書き綴って今号で143編になります。原稿用紙にして800枚ほどです。ここまで倦むことなく種切れになることもなく書き続けられたのは、読んでくださる方々のお陰です。感想を送ってくださる方、質問をくださる方、疑問を呈する方など私の善知識（仏教の正しい道理を教え導いてくれる人）の皆さんの言葉が私をありのままの日々の歩みへと導いて下さいます。頂く言葉が私の行いの道しるべとなっているのです。そんな善知識の一人から有難いメールを頂きました。主題は私の書いたイエ制度の崩壊と日本の共同体の変容と生滅についての感想と疑問だったのですが、その終わりに（メールの勝手な転載をお許しください）*“最後に、私の読み違いだったらすみませんが、「流れに掉をさす」を「流れに逆らう」という意味で使っておられませんか？　「波に乗る」と対句となっているので、そう読み取れます。とすると「流れに乗る」という本来の意味から外れることになります。そういう誤解はよくあるようで、私自身長いこと間違えていたので、気になりました。云々“*と書かれていました。まさしく私の誤用を正しく読んで頂き、続けて自身も草枕の冒頭の一節を引いて、かつて誤った解釈をしていたことに気づいて冷や汗をかいたことを今でも恥ずかしい記憶として覚えているとも書かれていました。ここに改めて前号の言葉の誤用を訂正いたします。

私はこのメールを頂き有り難さと感謝の念を強く持ちました。ひとつはここまでにも私の仏道のあゆみをみつめていただいている眼差しへの感謝。この眼差しは仏の慈悲の「慈」です。そしてひとつは仏の道へと導く叱咤激励の灯火への感謝。この激励は仏の慈悲の「悲」です。「慈悲」という言葉は分かり易いようで逆に定義が難しい言葉です。辞書的に言えば”「慈」はサンスクリット語のmaitrī（友情）にあたり深い慈しみの心をさし、「悲」はkarunā（同情）にあたり、深い憐みの心をさす。“注1となります。衆生に幸福を与えるのが「慈」であり、不幸を抜き去るのが「悲」であるともいいます。喜びを与え苦を除くことが「慈悲」ということになるでしょう。これはやみくもに優しく保護して守ってあげることではありません。優しさと厳しさを合わせ持ちながら私たちが歩くべき道を指し示す、導きの眼差しと灯明です。生まれたばかりの赤子が父母の愛情に導かれ成長していく過程に喩えれば分かり易いかもしれません。母性が「優しく子供を庇護して受け入れる」のに対し、父性は 「時に厳しく突き放しながらも社会性を育てながら護る」というように言えるとしたら、母性は受容する「慈」、父性は保護する「悲」と喩えられるのではないでしょうか。私たちは仏さまの子どもたちです。親である仏の慈悲を一身に浴びて仏の道を歩み続ける仏子たちなのです。

ところで私たちのあゆむ仏の道は特別な道ではありません。私の考える仏の道は何か特別のお祈りをしたり修行をしたり布施をしたりすることでは決してありません。日常を日々悔いなく楽しく心穏やかに過ごすことが仏の道をあゆむことです。ありのままの日々を送ること、仏の慈悲に守られ導かれた日々を生きることです。決してどこかの教祖様の言いなりや、宗派の取り決めに従った宗教活動の日々を送ることではありません。私自身の毎日を私自身がありのままに、観たままに過ごすことです。それが仏さまに出会い続けることなのです。宗教施設の奥に鎮座する偶像や有難い聖典や教祖の言葉を何べん繰り返し拝んでも、唱えても仏さまに出会うことは決してできません。私の諸行無常の毎日と他者の諸行無常の毎日とが交差するところが私たちが仏さまと出会うところなのです。おのおの自身の中に在る仏さまは、他者と互いに交わることでそれぞれの中に現前するのです。仏さまは私たちの当たり前の毎日の中に在るのです。

前号の私の軽率な言葉の誤用から、改めて仏の道や慈悲について私に考え、記述する機会を与えてくれた善知識に感謝します。私の日々と交差する他者がある限り私の仏のあゆみを止めることはできないでしょう。また狂言綺語をこれからも書き続けていくことになるでしょう。これは私の意志ではなく仏さまの導きだからです。それが仏の道をあゆむということなのでしょう。前号の末尾で書いたように、自己と他者の各々の変化の波を尊重しその変化が交わるときにそこに仏のいのちが生まれるということを智慧ではなく行いとして、今回実感を持つことが出来ました。その実感が諸行無常、縁起の世界、つまり仏の道をあゆむことだと改めてここに記述することが出来たことはまた私が仏の道をあゆみ続けていることの証しとなりました。仏の道をあゆみ続けていても、智に働けば角も立ち、情に棹させば流されもし、意地を通せば窮屈なことだらけでしょう。兎角に人の世は住みにくいと分かれば、その住みにくい人の世を、ありのままに観てありのままの日々を生きることを願い誓い行えば、それが仏の道をあゆむこととなるのです。

注１：コトバンク

琉游舎：戸井　出琉・恭子
問い合わせ：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319－17コリーナ矢板Ｃ－８５０
メール：toi101izuru@outlook.jp